

うらみ

裏見の西洋女性史・覚え書 (三)

大江 一道

(六) 市民革命と女性

フランス革命について現在もつとも有力な見方とされているのは、複合革命論というもので、いくつもの社会階層の力が複合して革命勢力となり革命を推進した、とする考え方である。一七八九年に始まるフランス革命のその複合とは、自由主義的な貴族、ブルジョワ、都市民衆（サンキュロット）、農民の四階層からなる。この複合革命論は、フランス革命についてばかりでなく、ロシア革命（三月革命）などもふくめて一般に市民革命に共通に適用される理論として注目されているのだが、私としては、この革命理論のなかに、もっと女性の位置づけや役割が、きちんとすえられる必要があると思っている。もっとも、イギリス革命やアメリカ独立革命にはほとんど現れてこない女性の固有名詞が、フランス革命のばあいには浮かび上ってくるのが大きな特徴である。これは、フランスの研究者によるフランス革命の研究が、ひじょうに深い部分まで目を行き届かせていることの結果であらう。歴史ジャーナリストとして知られるアラン・ド・コッの一般向けの読み物のなかにも、革命に活躍した女性としてオランブ・ド・コッ

ージュ、テロワーニユ・ド・リメリクル、クレール・ラコンブ、ボーリー・スリレオンといった女性が、マリ・アントワネット、ジャコバン派のマラーを暗殺したシャルロット・コルデ、ジロンド派のマダム・ロラン（ロラン夫人）などとともにとりあげられている。⁽¹⁾フランス革命は、それに先立って現われた啓蒙思想と啓蒙思想家の影響を受けて起ったといわれているし、学校でそう教わった人は多いはずである。それはそれでまちがってはいないが、では、啓蒙思想や啓蒙思想家は女性の解放もめざしていたのか、というと、決してそうではない。ヴォルテールやルソーのようなラディカルな思想家も世の保守主義者同様、女性の才能を軽ろんじていた。たとえば「これまで女学者や女丈夫はこの世に出現したが、創意に富む女の天才が世に出たためしがない」という言葉は、ヴォルテールのもの。「天才を必要とする仕事は女性の能力を越えたものである。彼女たちは精密科学に成功するだけの正確さや注意力を持合わせていない」という言葉は、ルソーのものである。ヴァラン夫人との共同生活を、なにもまして貴重なものと同化したルソーが、パリの下宿の娘テレーズに生ませた五人の子どもは次々に捨子にしたし、有名な教育論の本である『エミール』

は、結局のところ男性本位の子ども教育論であって、女の子は男の幸福のためにしつけられなければならない、という思想を一貫して教こんでいる作品である。ソフィーという少女が一二歳になっても読むことができないのだが、ルソーは「女の子がそんなに早くから読み書きができなければならぬ必要^(と)がどこにあるのだろうか」といって、これを肯定するのである。

しかし、幸いなことに女性のほうが賢かったのであって、ルソーの賛美者になった『進んだ』母親たちは、娘をソフィーのようにでなく、エミールのように育てがちになったという。女性ざらゐのルソーが逆説的に女性を励ました例は、このほか、赤ん坊のからだはもつと自由にし母乳によつて育てなければいけない、と訴えたことである。これは、里子にだす習慣にしばられていた母親たちに、その考え方をひっくりかえすような衝撃をあたえた。革命中ジャコパンの恐怖政治の犠牲となつて、ロラン夫人がギロチンにかけられたとき、死刑台にのぼつていった彼女の最期の言葉は「私の乳で育てた私の最愛の子よ、さようなら」であつたという。ルソーの女性論にもかかわらず、というべきか、その女性論のゆえに、というべきか、むずかしいところだが、事実はいかに、ルソーが死んで一一年後にフランス革命は起つた。

フランス革命は、特権階級の僧侶や貴族にも課税しようとしたルイ一六世の政権に対して、特権を守る目的で、三部会を開けという要求の特権階級がつきつけ、これを王が認めて一七八九年五月に、ヴェルサイユ宮殿で開いたことから始まる。複合革命論でいうところの「貴族の革命」である。これに乗つて第三身分のブルジョワが憲法の制定をせまる、「ブルジョワの革命」の口火が

きられる。しかし、ヴェルサイユでの動きとはべつに、永年の専制政治と、食料不足などの経済不安とに腹を立てたパリの民衆が、王権の軍事的威圧に激昂してバスチユ牢獄を襲撃し、いづきに革命情勢をつくりだす。これが「都市民衆(サンキュロット)の革命」である。この知らせをきいて、地方の農民たちが、貴族が仕返しをするかもしれないぞ、という恐怖の流言(貴族の陰謀)を信じて、領主の館を襲ひ、土地証書などを焼いて、封建制度をひっくりかえす騒ぎとなる。これが「農民の革命」である。

こうして、一年のうちに四つの革命が複合してフランスの旧制度は崩壊していくのだが、バスチユ襲撃にも領主をおそう蜂起にも、もちろん女性も参加した。ヴェルサイユの議員たちは、この下からのげしい力に押されて、情勢に歯止めをかけたい意向もあつて、八月に、封建制度の廃止とやがてつくられる憲法の前文にあたる『人権宣言』を国民議會で決議した。王がこれらを認めず、手づまりがうまれていたとき、それを打開したのがパリの女性たちであつた。一〇月五日に、「パンをおくれ!」という要求をもつて、六〇七〇〇人の女たちが、ヴェルサイユまで六時間も行進し、ルイ一六世と代表の会見を実現し、翌日、国王、マリアントワネット、王子たちをパリの宮殿につれもどすというおどろくべき成果をあげたのが「ヴェルサイユ行進」である。

しかし、議會の男たちは相変らずのスロー・モーで、憲法がやつと制定されたのは一七九一年の九月であつた。しかもこの憲法は、貧乏人無視、女性無視の憲法であつた。一七八九年にだされた『人権宣言』は、正確には『人間と市民の権利の宣言』というのであつて、その人間にも市民にも、女性が含まれていなかった

のである。この『宣言』を前文にとりいれたフランス最初の一七

九一年憲法を読んで腹を立てたオランブードルグ⁽³⁾ジェは、いっきに『女性と婦人市民の権利の宣言』を書きあげた。その第一条――

女性には生まれながら自由な存在にして、男性と平等の権利を有するものである。社会的身分の区別は、公共の福祉の点にのみ基礎を置いてなされるべきものである。第一〇条――女性には死刑台に

上る権利をもつ。したがって演壇に入る権利も有するものである。また、その第一条では、当時かなり多かった未婚の母や、寡

婦でありながら子を生むようになった女性を救済するために、そういう子のためにも財産があたえられるべきだ、と述べている。

ところで、じつは、ブルジョワ急進派のジャコバンと都市の民衆（おもに男子）によってラディカルに進められるフランス革命

においても、女権拡張論者は嫌われていたのである。オランブは共和主義者の立場をとっていたが、ルイ一六世の死刑には反対で、

そのことを公言する活動のため、革命派から憎まれて、一七九三年一月三日、ギロチンにかけられた。ときに四五歳であった。

次に、革命中につくられた女性だけの結社のことにふれてみたい。ジャコバン派というのは、パリのサントレノ街にあるジャ

コバン修道院の食堂を集会場とした革命派をさすわけだが、一七九一年から公開制をとった。ここの議論を労働者が夫婦で聞き

にきているうちに、妻たちだけで、修道院の地下礼拝堂に集まって議論をしだすようになった。これが女性だけのクラブの始まり

であるが、ここに現われて女性の権利の獲得を訴え、婦人たちに大きな影響をあたえるようになったのが、一七七四年からパリで

暮っていたオランダの婦人、四八歳のエッタルバルム⁽⁴⁾デルデル

である。

彼女が最初に、女性クラブをつくらうと提案したのは、一七九一年三月二三日の武装市民集会であったようである。さっそくク

ラブが設立され、「自由の敵」を監視し、婦人たちがたがいに助けあおうという仕事を続けていった。そして、一七九二年四月一日

には、エッタルバルムは、女性代表団の先頭に立って議会に押しかけ、女性の成年を二一歳とし、この年になったら女性も政治の自

由を得て男性と平等の権利が得られる、ということをはっきり宣言してほしい、と申し入れた。また、国民教育の必要と離婚制度

の確立についても訴えていた。これに対して立法議会の議長は、「立法議会は婦人市民たちの不満を買うようなことは避けるようにいたします」とだけしか発言しなかったという。

もう一つの組織は、一七九三年五月に結成された「革命共和婦人協会」である。⁽⁵⁾これは、クレールラコンブとボリーヌレオン

の二人が中心となつてつくった組織である。ラコンブは南フランスで女優をしていた二八歳の女性であり、レオンはチヨレット

製造業者の娘で、家の仕事を手伝っていた二五歳の女性であった。この会は、一八歳以上で身持のよい婦人市民（シトワイエンス）

のみが入会できるという規則をもち、社会階層からいえば、小ブルジョワの婦女子で構成されていた。とはいえ彼女らは、共和国

を死守することを誓い、男たちがたたかっている戦いを女も分担したいのであって、女たちを閉めださずに、共和国のしかるべき

行政ポストに活用してほしいと訴え、しばしば国民公会に圧力をかけた。ところが国民公会の議員たちは、ロベスピエールも含めて、このような動きをにがにがしく思い、ことあるごとに反発

し、圧迫した。女は政治などに口出しをせず、家庭に引っ込んで家事に専念しろ、という理くつである。

しかし、彼女たちの敵は、同性の中にもあった。それは、「市場の女」といわれる、魚売りや果物売りなどの、いわば小ブルジョワとはちがう民衆の女たちであった。ことの起りは、協会の女性のシンボルとしてかぶる赤い帽子を、この物売りの女たちにもかぶらせようとしたことにある。反発した中央市場の女たちと、

一七九三年秋、流血の乱闘騒ぎになり、協会の婦人は、木靴やナイフで蹴られたり切られたりで、重傷者もでるほどの大騒ぎとなった。市場の女たちは、さらに議会に陳情に出向き、革命共和婦人協会を解散させるように、と要求した。

この結果は想像の通りであり、女性の政治参加を要求するような危険な結社は許せないと、国民公会の決議によって協会は解散に追い込まれた。議員のうちたった一人だけ弁護したものがいたという。「女性も人類の一部だということを認めるとすれば、思考のあるあらゆる存在に固有のこの権利を、女たちから奪うことはできないのではないだろうか」と。しかし、そんな原理にふれるような話はやめてもらいたい、と一蹴された。こうして、革命共和婦人協会は、わずか半年で姿を消し、議会はさらに、婦人が地区の会議に参加することを禁止する、という措置をとった。

女性の活動力がいちじるしく奪われていくことと、革命がいきづまることは、まったく比例していった。一七九五年からは、保守的な上層ブルジョワがまきかえしに出、革命は終焉を迎える。しかしいづれにせよ、この革命によって男性ブルジョワが政治権力にくいこむことは可能となり、私的所有権が、侵すことのでき

ない権利であることも保証された。これらを法的に確認したナポレオン民法典のなかで、女性を男性に隷属させ、家庭に押し込める規定をもちこんだことは有名である。このことは、市民革命なるものが女性にとっていかなる性質のものであるか、をめぐりに象徴する事実として、私たちは忘れるわけにはいかないことだと思ふ。

註

(1) アラン・ドゥコー、渡辺高明訳『フランス女性の歴史3 革命下の女たち』大修館書店、一九八〇年。

(2) ルソーの女性観に対する批判は、水田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房、一九七九年の「第二章 ルソーにおける家族と国家」が参考になる。

(3) アラン・ドゥコー、前掲書、一四二頁～一四三頁。ジャン・ラボー、加藤康子訳『フェミニズムの歴史』新評論、一九八七年、六八頁～七一頁。

(4) 以下の記述は、アラン・ドゥコー、前掲書、一三七頁参照。
(5) 『革命共和婦人協会』の研究については、天野知恵子「一七九三年パリの革命婦人協会——民衆運動の側面」『史学雑誌』第九〇篇第六号、一九八一年六月が詳しく扱っている。他にジャン・ラボー、前掲書、七九頁～八四頁も参照。

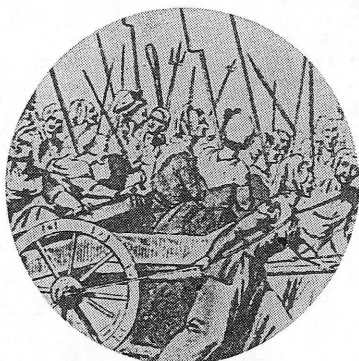
なお、セレスタン・ギタールの『フランス革命下の一市民の日記』レイモン・オベール編、河盛好蔵監訳、中央公論社、一九八〇年)の「一七九三年十月三十一日 木曜日」の項には、次のような記録がある。

「赤い帽子——革命協会の婦人たちは、パリ中の女性に赤い帽子をかぶらせ、ウールの洋服を強制したがつていた。

パリ中央市場の主婦さん連はこの提案に反対、双方の間で深刻な論戦が交された。同二十九日、服装の自由について公会へ提訴。公会は、誰でも好きなように装う自由、そして、他人への服装の強制を男女をとわずすべての人に禁止すること、を決議した。これで好きな服が着られるし、誰も服装に文句をつけれなくなった。

中央市場の主婦さんたちは、すべての婦人クラブ廃止を要請した。公会はこれをうけて、翌三十日の政令で、いかなる名目のもとでも、女性が集まって庶民的団体をつくることを禁止した。こうして婦人クラブは廃止された。ただし公会は、男性がつくっている民衆的団体の公開会議への出席については、婦人クラブに所属していた女性にも、他の女性同様、参加を許可した。」(同書一六五頁—一六六頁)

(おおえ かずみち・専任・西洋文化史)



ヴェルサイユ行進



ロラン夫人